

黒水仙の夫人

北原武夫

《同じ著者によって》講談社刊	色事師（小説）	1968年
告白的女性論（エッセイ）1957年	幻の美女（小説）	1968年
薔薇色の門（小説）1965年	魔女日記（小説）	1969年
真昼の天使（小説）1965年	憂愁日記（小説）	1969年
危険な日記（小説）1965年	向日葵の女（小説）	1969年
火の折り（小説）1966年	紫陽花の女（小説）	1969年
誘惑者の手記（小説）1966年	ドンファン日誌（小説）	1970年
女・色見本帖（小説）1967年	花川戸助六（小説）	1970年
ミモザ夫人（小説）1967年	紋之丞色ざんげ（小説）	1970年
プレイ・ボーイ日記（小説）1967年	霧雨（小説）	1971年

黒水仙の夫人

昭和46年12月24日 第1刷発行

著 者 北原武夫

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽 2-12-21

郵便番号112／振替東京3930

電話東京03(945)1111(大代表)

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 大製株式会社

© Takeo Kitahara. 1971 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

0093-125619-2253 (0) (文1)

黒水仙の夫人・目次

黒水仙の夫人

5

女の恥辱

71

もの言わぬ官能

109

愛に顫える階段

155

偽りの情事

195

黒水仙の夫人

裝幀
||
CAP

黒水仙の夫人

1

昨夜も深夜まで眠れずにいて、昼近く眼をさました亮は、朝食兼帯の軽い食事をルーム・サービスで部屋に取って済ますと、午後二時頃、ぶらっとホテルを出た。

足は自然に、このMホテルから近い南禅寺の方に向く。十一月初旬の京都にしては珍らしく暖かい陽差しが、半ば以上紅葉した東山一帯を赤く染めていて、その照り返しが眩しいほどだ。観光シーズンを少し外れているせいかな、疎水に沿ったこの道から南禅寺橋にかかるあたりまで、彼は殆ど人影に出会わなかった。

京都特有の、空気の綺麗なひっそりとしたこんな道を歩いていると、愛欲の懊惱でどろどろに汚れていた胸の中が、一ぺんに洗われるような思いがする。何ということなく、不意に思い立って京都に來たのだが、彼はやっぱり来てよかったと思つた。

南禅寺橋を渡って寺の境内に近づくと、さすがに観光客の姿が目立ったが、それもバス

などで押し寄せて来る多人数ではなく、三、四人ずつ連れ立った極く少数で、小庵をかこむ白壁の築地塀のつづく方丈への道は、松の緑や紅葉の香が匂って来るほどひっそりとして物静かだった。

そこだけ人の姿が群がっている、方丈の前庭の石の上に腰を下ろして、しばらくぼんやりと煙草をふかしていた彼は、今までに何度も見た方丈の庭を見る興味もないので、陽が少し斜めになりはじめたのを機会に立ち上り、今度は逆に法堂の方に向って、紅葉している樹々の間の小径をゆっくりと歩き出した。そして法堂を通り越して、山門のところまで来なかった時だった。彼は思わずハッと息をのんで、足を停めた。

高い石の土台の上にとっしりと円柱を据えた、朱塗りの山門の、赤々と陽に染まったその円柱の一つに背をもたせかけるようにして、絵のように美しい一人の女が、ひっそりと佇んでいる姿が彼の眼に入ったからだ。

松の緑と紅葉の色を混じえたあたりの樹木と、午後の陽に映えた山門の渋い朱の色とを背景にしているせい、白綸子の裾に淡い藤色で何かの模様を染めた着物と、遠くからは無地のように見える濃い紫色の総絞りの茶羽織を着て、サファイア・ミンクのストールを手を持ったスラリとしたその姿は、全く一幅の絵のように見えた。

しばらく阿呆のようにその姿に見入っていたのち、やっと我に返ったような心地で、そろそろとそっちに歩み寄っていった彼の眼に、見るからに柔かそうな栗色の髪をアップにした髪型と、濃い睫毛に翳って深々と濡れたような眼の色と、象牙色ぞうげに汚えてうすら冷たい光沢を帯びた繊細な形の頬とを持った、その横顔の線の優雅な品のよさが、近々と見えて来るにつれて、彼の胸は一層妖しく高鳴った。わけても、その彼の胸を何とも言えない思いで強く締めつけたのは、その象牙色に冷たく汚えた横顔に浮かんでいる、つつましく抑えてはいるが見る者の眼にはそれと分らずにはいない、何となく懈怠けだくてもの憂うような哀愁の色だった。

山門の土台になっている石廊の、その石段の手前まで来て足を停めた亮は、ちょっとそこでためらったが、思い切ってそのまま上っていった。その蹣音むしに、ちよつとこつちを振り向いた女と、彼はその時はじめて正面から顔を合せた。その瞬間、彼は思わずゴクリと息をのんだ。遠くからは三十二、三に見えたのに、近々と見ると女は意外に若く、せいぜい二十七、八にしか見えなかった上に、暗く沈んで濡れ濡れとしたその眼の中に、その一瞬、ほんのかすかだったが、深い水底で何かの影が揺らめいたような感じで、一抹の翳りに似たものがチラッと掠め去ったような気がしたからだ。しかし、次の瞬間、もう女は、うす

ら冷たい横顔を見せてもとに返っていた。その女の顔の前を、片頬に彼女の視線を痛いほど感じながら、彼は全身を硬張らせ、身も心も石のようにコチコチに固くなったまま通り過ぎた。

彼がようやくおのれをとり戻すことができたのは、夢の中を歩くような心持で境内の外れまで歩いて来た時だが、そこで足を停めてゆっくりと振り向いてみると、女は丁度こっちにそのしなやかなうしろ姿を見せて、彼とは逆な方へ歩き出して、ひっそりした歩きつきで石段を降りかけたところだった。その女を追って、もう一度あとに引返すわけにはゆかず、何とも言えぬ心残りでジリジリと胸を焼かれながら、斜きかけた陽の光を浴びて赤々と輝いている紅葉した木立ちの間を、ゆるゆると遠ざかってゆくその女の姿を、彼はその場に立ちつくしたまま、ただぼんやりと見送っていた。

その足でホテルに帰った彼を、僅かに慰めたのは、その女は明らかに東京からの旅行者で、もしかしたらこの同じMホテルに泊っているのではないかということだった。それでその日の夕食には、彼は早くから食堂に出て、できるだけ永い時間をかけて夕食を摂り、食後も、その食堂の出入口に当る土産品売場をうろついたり、そこを一ト目で見渡せるその奥のバアに入って、永い時間をかけてウイスキーを飲んだり、最後には、一階のロビー

の奥の喫茶室にまで顔を出したりしてみたが、ついにその女の姿を見つけることはできなかった。

その翌日一日も、同じような焦躁と失望で過したのち、フロントで訊くわけにはゆかないので、数人のボーイに当ってみても何の要領を得ないまま、半ば断念した彼は、あくる日の午後、詩仙堂や竜安寺などは、この前来て見にいった時すっかり俗化してしまっていて気が進まなかったたので、いつ京都に來ても見残していた光悦寺を見に、ホテルのハイヤーを雇って洛北の方に走らせた。

この日も暖かな日で、もの寂びたさやかな町通りに面している寺内に入ってみると、光悦を慕って集まった多くの茶人や陶工たちの住居だったという、数々の茶室づくりの草庵をかこんで、鬱蒼と茂った樹々の紅葉が柔かな陽差しに照り輝き、その間をうねりくねっている砂利を敷いた小径には、山茶花さざんかの白い花がこぼれていたりして、期待していた通りに清々しくて静謐せいひつな一廓いっぽくだった。小径を歩いている観光客もほんの数えるほどで、落葉の音が聞えそうなほどひっそりしているのも心地よかった。

前日來の焦躁も忘れたような心持になった彼が、なおも一人で奥の方に道を辿っていつて、名の知れぬ大きな樹が、紅葉した葉簇はぐらをいっぱい茂らせた太い梢を、小径の上を覆

うばかりにしているその下をくぐり抜けた時だった。その草庵の蔭になって見えなかった、その道と交差している小径の一つに、不意に姿を現わした二人の女と出会った彼は、思わず口の中で「あッ」と小さな声を立てた。その二人の女のうちの一人は、せいぜい二十三、四の若い女だったが、もう一人の女は、紛れもなくあの南禅寺の山門に佇んでいた女だったからだ。

その女は、この前の和服姿とは違って、今日はやや厚手の深い葡萄酒色のシルク・ヴェルヴェットのツウピースを着て、胸もとにピンク真珠のネックレスを二重に垂らし、同色の長手袋をした片腕にパロミナ・ミンクのストールを抱えていたが、そのドレスの色が冷たく冴えた象牙色の肌に素敵によく似合っているばかりか、びっちりしたドレスから窺われる、なよなよとしていながら適度に引き緊まった肢体の線と、特にやや短めのスカート裾から見えている繊細な脚の線が、言いようのないほど小粋で美しかった。

もっと若い連れの女の方は、彼女とはまたガラッと趣きが変わって、異様なほどキラキラと強い光を湛えた大きな眼と、カチンと音がしそうなほどに硬く整った頬とを持った、何処かバタ臭くて野性味のあるその小麦色の顔立ちにふさわしく、真っ白なシルク・ニットのスポーティなワンピースをびっちりと身につけた、やや小柄なその肢体も小気味よく引

き緊まっている上に、白いブーツと極端に短いミニ・スカートとの間で露わになっている脚の線も、眼に沁み入るほどムチュチとしていて、何処から何処まで、もう一人の女とは対照的だった。

ぱったり顔を合せたまま、双方で立ち停まった切り、キツチリ一分ぐらいの間どっちらも声が出なかったが、若い方の女が大きく眼を瞞みはって、浅黒い頬を見るからに生々と輝かしたかと思うと、二、三步、歩み出すようにして、固苦しい沈黙を破って彼に声をかけた。

「あのウ、まことに失礼ですけれど、土岐先生じゃアございません？ 違いました？」

2

「ええ、そうです。僕は、土岐です……」

思いがけない言葉にハッと胸をとどろかせながら、亮がそう答えると、キラキラと輝くその眼の中に眩まよしいほどの光を湛えて、なおもじつと彼に見入ったまま、その女は固く引き緊まった頬をそよがせて、さも人懐っこそうな微笑わらい方をした。

「どうもそうじゃないかと思ったんですけれど、ではやっぱりそうでしたのね？　こんなところでお目にかかれて光榮ですわ」

「……………」

「あたくし、先生の愛読者で、丹羽暁子と申しますの。先生のお書きになるものは、大抵読ませて頂いておりますわ。先生には、前から一度お目にかかりたかったんですけれど。」

……こちらは、あたくしの母ですの」

その傍かたわらに無言で立って、翳の深い寂しそうな眼を妙にしいんとさせたまま、綺麗に揃った睫毛も動かさずに、そっけないくらいにじっと彼を見つめていたもう一人の女に、その時チラッと眼をやってそんな風に紹介すると、暁子というその女は、意外な言葉に驚いてなお一層声の出ないでいる彼に向って、もう一度至極大胆な、しかし自然な快活さで微笑みかけた。

「あたくしたち、二、三日前から京都に来ておりますんですけど、先生もやはりご見物ですの？」

「ええ、見物というほどじゃありませんが、暇つぶしにあちこちぶらぶらしてるんです」